

2018年7月西日本豪雨災害

土木学会会長を団長とする調査団による報告

July 2018 West Japan Disaster Bought by Torrential Rain :
Brief Report by the JSCE Presidential Mission

小林 潔司 フェローク会員 土木学会会長、京都大学大学院教授
清水 則一 正会員 土木学会中国支部長、山口大学大学院教授

平成30年6月28日以降の台風第7号や梅雨前線の影響によって、西日本を中心に全国的に広い範囲で発生した豪雨（気象庁「平成30年7月豪雨」）は、6月28日から7月8日までの総降水量は四国地方で1800mm、東海地方で1200mmを超え（図1参照）、7月の月降水量平年値の2〜4倍となる地域もあった⁽¹⁾。この大雨によって、河川の氾濫、浸水害、土砂災害等が発生し、死者・行方不明者は1府13県で230名を超え、家屋、道路、鉄道、公共土木施設、農業・林業施設等にも甚大な被害を及ぼした⁽²⁾。

土木学会では、会長を団長とした

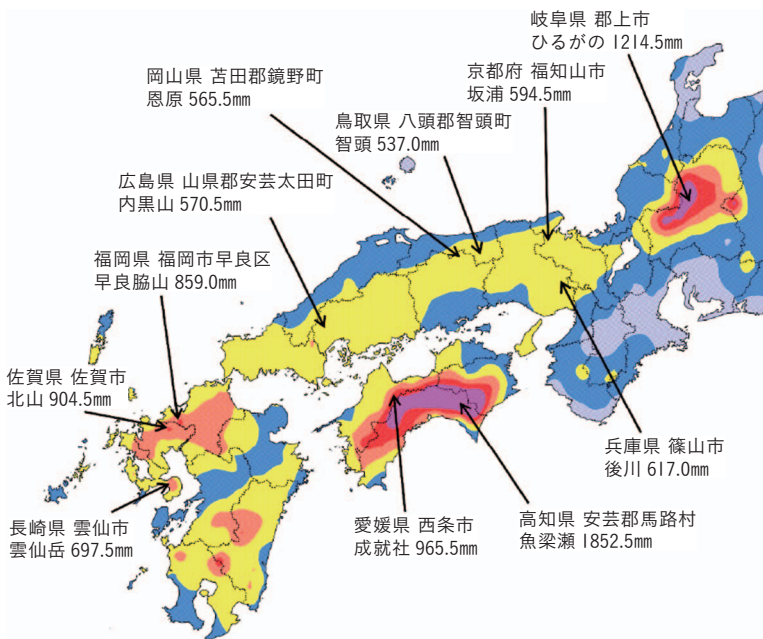


図1 期間降水量分布図(6月28日0時~7月8日24時、参考文献(1)から転載)

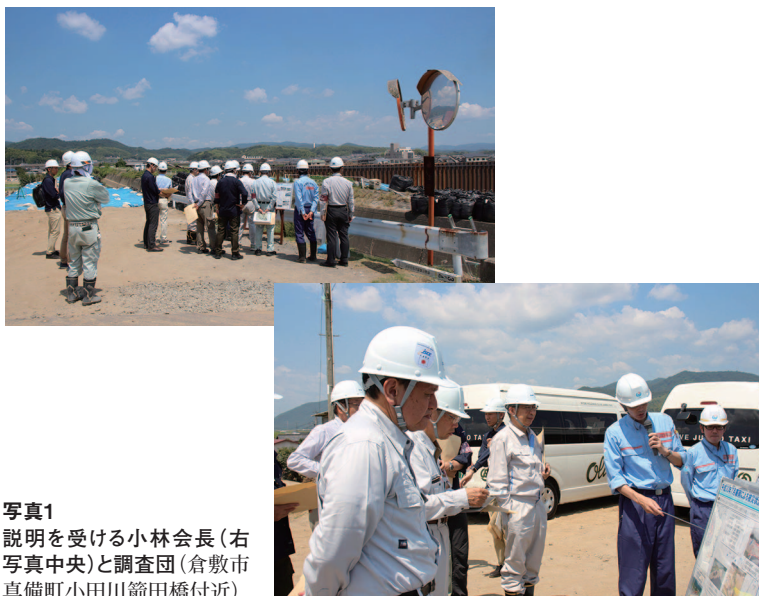


写真1 説明を受ける小林会長(右写真中央)と調査団(倉敷市真備町小田川箭田橋付近)



KOBAYASHI Kiyoshi (写真右)

1978年京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修了、京都大学助手を経て1987年鳥取大学に勤務。1996年より現職

SHIMIZU Norikazu (写真左)

1981年神戸大学大学院工学研究科土木工学専攻修了、神戸大学助手を経て1992年山口大学に勤務。2000年より現職。

表1 会長特別調査団構成

団 長	小林 潔司	土木学会 会長 (京都大学 教授)	
副団長	清水 則一	土木学会 中国支部長、土木学会中国支部西日本豪雨災害調査団総団長 (山口大学 教授)	
団 員	浅見 郁樹	土木学会 副会長、防災減災・災害復興担当 (東日本旅客鉄道(株))	
	堀 智晴	土木学会 社会支援部門主査理事 (京都大学 教授)	
	清水 康行	土木学会・水工学委員会委員長 (北海道大学 教授)	
	勝見 武	土木学会・地盤工学委員会委員長 (京都大学 教授)	
	前野 詩朗	土木学会中国支部、西日本豪雨災害調査団 岡山河川グループ団長 (岡山大学 教授)	
	土田 孝	土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島土砂グループ団長 (広島大学 教授)	
	小松 利光	土木学会 水工学委員会 顧問 (九州大学 名誉教授)	
	塚田 幸広	(公社) 土木学会 専務理事	
	協力者	河原 能久	土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島河川グループ団長 (広島大学 教授)
		田中 健路	土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島河川グループ (広島工業大学 准教授)
森脇 武夫		土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島土砂グループ (広島工業大学 教授)	
加納 誠二		土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島土砂グループ (呉工業高等専門学校 教授)	
橋本 涼太		土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 広島土砂グループ (広島大学 助教)	
藤原 章正		土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 生活インフラ被害グループ団長 (広島大学 教授)	
鈴木 素之		土木学会中国支部、西日本豪雨災害合同調査団 山口グループ団長 (山口大学 教授)	

特別調査団を結成し(表1参照)、8月4日に岡山県、および、広島県の被災地を視察した。視察箇所は、倉敷市真備町高梁川系小田川氾濫による浸水域、および、堤防決壊箇所と緊急対策工事現場、さらに、広島市安芸区県道34号線昭和入口交差点付近、および、同区矢野東梅河団地(土石流による被災)である。これらの被害は、7月5〜7日の雨がもたらしたものであり、土木学会中国支部では7月9日に緊急災害調査団

(6グループ)を発足し、被災直後から調査を行っている⁽³⁾。会長特別調査団は視察後、広島市内において、中国支部調査団のメンバーと合流して記者発表を行い、当日の視察内容、および、これまでの調査結果を説明した⁽³⁾。なお、中国支部以外の地域においても各支部調査団を結成し精力的に調査にあたっている。調査結果がまとまり次第報告会で公表していく予定である。

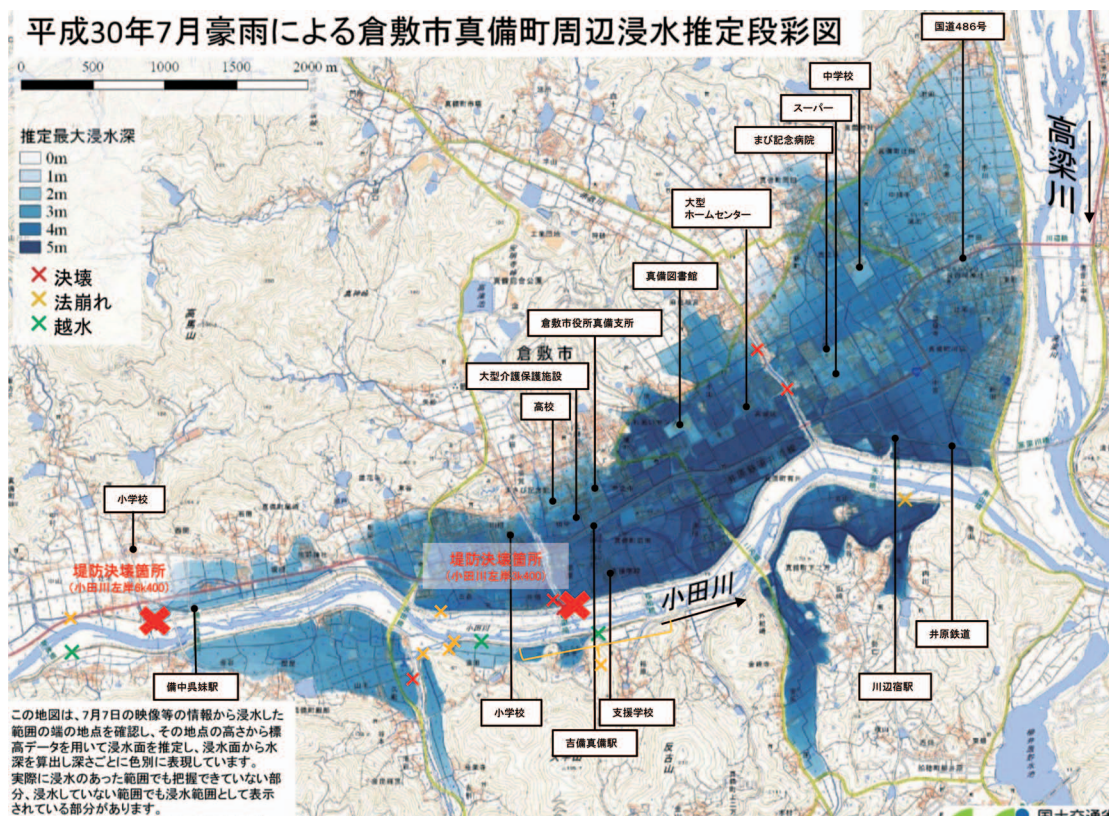


図2 倉敷市真備町浸水推定図 (提供:国土交通省中国地方整備局)

氾濫状況 (高梁川水系小田川)

小田川等の堤防決壊により、介護施設、病院、学校等が浸水し、浸水深は最大で約5m[※]に達したものと推定されます。

※1: 国土地理院による推定では約4.8m。岡山河川事務所による痕跡調査結果では約5.2m、土木学会の災害調査団による調査では約5.4mと推定されています。

※数値等は速報値のため、今後の精査等により変更する場合があります。

国土地理院公表資料を基に作成



図3
土砂災害を受けた広島市安芸区の視察箇所 (上: 国道34号線昭和入口交差点付近の被災、右: 梅河団地の被災) (図はいずれも土田孝教授 (広島大学) 提供)



写真2
緊急対策工事 (上: 小田川支流高馬川、上流方向を臨む。左: 小田川左岸)



写真3
小田川箭田橋付近 (上: 氾濫時 (提供: 国土交通省中国地方整備局)。右: 視察当日小田川右岸から左岸緊急対策工事現場を望む。小田川河川内植生伐採工事中)



写真4
県道34号線昭和入口交差点付近から広島熊野道路 (高架) を望む (左: 写真右の河川 (中央植生右) が土石流で埋まり左の道路にあふれる。右: 広島熊野道路付近。残された被災車両がみえる)





写真7
梅河団地土石流流出跡(上: 治山ダム側から団地方向(土石流流下方向)を望む。左: 団地から治山ダム方向を望む。背後の山に土石流の痕跡が残る)



写真5 熊野道路基礎部の被災(上: 河川を流下した土石流が基礎部分をえぐる、下: 路面流出によってむき出しとなった埋設物)



写真8 記者発表の様子(上: あいさつする小林会長、下: 説明風景)



写真6
梅河団地被災状況(上: 写真の右側(治山ダム方向)から土石流が押し寄せる。下: 土砂で埋まった治山ダム)

参考文献
(一) 気象庁: 災害をもたらした気象事例平成30年7月豪雨(前線及び台風第7号による大雨等)、気象庁2018年7月13日発表資料(pdf)・https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/rep_orf/2018/20180713/20180713.html
(二) 消防庁: 平成30年7月豪雨及び台風第12号による被害状況及び消防機関等の対応状況(第54報)、<http://www.fdma.go.jp/bn/2018/detail/1052.html>
(三) 土木学会中国支部: 2018年7月西日本豪雨土木学会中国支部緊急災害調査 <http://committees.jace.or.jp/chungoku/node/103>

謝の意を表す。
関にご協力いただいた。ここに感謝の意を表す。

謝辞..

本調査にあたり、国土交通省中



写真9 国土交通省中国地方整備局表敬訪問